
あの人の話

road

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの人の話

【Nコード】

N2068Y

【作者名】

road

【あらすじ】

好きになった人には家庭があつた。どうにもならないと知りつつも好きな思いは止められない。そんな時の話です。

第一印象は指だった。細くて骨張った、形のいい指。今思うと、その時から恋をしていたのかもしれない。あの人の指が好きだった。かちやかちやとベルトの金具をかける音がして、しゅるしゅるとネクタイを結ぶ音がする。間もなくガラス製のテーブルから車の鍵を拾う音がして、足音が近づいてくる。あたしは、目を閉じたまま寝たふりを続ける。ぎしつとベッドが沈み、耳元にその人の唇がすすかに触れる。

「ごめん。」

あたしの目から一滴涙がこぼれた。その人は気づかないふりをしてくれた。またぎしつとベッドが振動して、その人の体が離れていく。足音が遠ざかっていき、遠くでドアを開ける音がして、閉まる音がした。

ガチャン。

あたしはようやく目を開けて、深く息をついた。そして、ずっと溜めていた涙を思いつきり流したけれど、その量と来たら大量で全然収まる気配がない。あたしは声をあげて泣いた。自分で自分を抱き締めたら、そのとき初めてひどく震えていることに気付いた。

さようなら。

泣きながら心の中でそれだけを想った。

さようなら、さようなら、さようなら…

その人と出会ったのは半年前だった。あたしは大学を卒業して3年ほどフリーター生活をし、25歳のときに今の会社に就職した。その時、指導係としてついてくれた直属の上司が彼だった。

顔を見て、初めまして、よろしく願います、と頭を下げたときはなんとも思っていなかった。じゃあこの資料を見て、と紙を渡されたとき、その指にしばらく見とれた。なんてきれいな指してる

んだろう。それが第一印象だった。そしてその指には、細い銀色の指輪がはめられていた。

「お子さんはいらっしゃるんですか？」そう聞いたとき、彼は嬉しそうに顔をしてパソコンのデスクトップを指差した。そこには赤い頬をしてきよとした表情でこつちを見ている女の子の姿が収まっていた。「かわいいですね。」そう言うと臆面もなく「そうですよ、かわいいんだよ。パパ、パパって最近言うようになってさ。ママって言うより早かったんだよ。」と言った。

その後社内を案内してもらっていたとき、総務課と書かれた部屋の前で彼は「ちよつと待って。」と言うと、奥にいた人を手招きしてこつちに近づいてきたその人は、すらりとしたきれいな人で、あたしを見てにっこりと笑った。

「俺の奥さん。」

彼はそう言った。

それから4ヶ月が経った頃、彼が異動するという噂が持ち上がった。地方の支店長に抜擢されたとかで、昇進ということらしかった。それを聞いたとき、あたしはただ呆然とその場に立ち尽くした。何がそんなにシヨックだったのか自分でもよく分からないまま、その日の仕事をなんとかやつつけると、あたしは急いで家に帰った。ドアを閉めて靴を脱ぎ、ソファに座ってビールを一口飲んだら、ああ、と思った。ああ、あたしはあの人が好きだったんだ、って。

それから1ヶ月は通常業務に加えて彼からの引き継ぎをした。彼が目の前からいなくなる。その事実が頭の中を占領し、あたしの仕事のミスは目に見えて増えた。怒られたり自分の陰口を聞いたりしているうちに、あたしはすっかり落ち込んだ。

「どうしたの。元氣ないじゃん、最近。」

ある日彼が心配そうな顔をしてそう聞いてきてくれた。あたしは、

その時ぶつと自分の中で何かが切れるのを感じた。もう我慢できない、と思った。そして、あたしの口からは自分でも驚く言葉が出てきたのだった。

「あなたが好きなんです。だから、行かないでください。」
彼は目を丸くして固まり、あたしはまっすぐそれを見つめた。

引き継ぎが終わると、彼と会社で会う時間は減った。異動先に行ったり引越しの準備があったりして、忙しいようだった。

久しぶりにちゃんと会ったのは、送別会の席だった。みんなお酒を酌み交わし、お世話になりました、と頭を下げる彼を、あたしは遠くからぼんやり見つめた。

彼は二次会に行かずに帰ると言った。あたしは勇気を振り絞り、彼に言った。

「一杯だけ付き合ってくださいませんか。2人だけで。」

一瞬驚いた顔をして、それから彼は笑った。

「一杯付き合えて、男みたいだなあ。いいよ。行こう。」

あまりにも彼があっさりと爽やかだから、あたしはあの日告白したことも、今必死に一杯に誘ったことも、ひとりよがりだと感じた。

一杯、で済むはずもなく、あたしは居酒屋で多種類のアルコールをがぶ飲みした。そして、空気をうめるためにしゃべり続けた。会社で言われた陰口や年下の同期の若さ、歌手の結婚や離婚や好きな芸能人のこと、野菜の高騰や最近の異常気象なんかのことを。

彼はそんなあたしを止めるでもなく、話を聞いては頷き、笑ってくれた。

居酒屋をでたあとホテルに行った。

あたしは、好きだともう一度彼に言った。何度も、何度も。彼は、うん、分かった、と言った。そうして頭を撫でてくれた。この人の指が、あたしの体に触れるなんてことは、夢のまた夢だった。だから、夢かもしれないと思った。

そしてあたしは彼に抱かれたのだけれど、ほとんど処女みたいなあ

たしはカチコチに緊張して何もできず、申し訳なかったと思う。

目を開けると、時計が10時を指していた。彼が出ていったあと、泣きながら寝てしまったらしい。

明日から異動先での勤務が始まる彼は、今日引越すことになっている。

あたしはゆっくり体を起こすと、ベッドから降りてバスルームに向かった。シャワーを浴びて身支度を済ませると、意を決してドアに向かう。ドアノブに手をかけて、一瞬目を閉じる。さようなら、ともう一度心で想い、あたしはドアを開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2068y/>

あの人のお話

2011年11月4日06時06分発行